
精霊と彼女

白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊と彼女

【コード】

N0849P

【作者名】

白夜

【あらすじ】

精霊の加護を失った少女と彼女を愛する精霊の日常です。

第一話

買い物は、嫌いだ。

重い籠を握りしめてルシエーラは思う。

店主の忌々しげな視線も、ひそひそと交わされている言葉も。

どれも嫌ではあったけど、耐えられないわけではない。

けれど、耐え難いのは。

……重い、籠。

以前なら、持とうとしてくれる人がいた。

大丈夫、と笑っても。いつでも持とうとしてくれた。

じゃれるように籠を奪い合い、2人で持った籠。

今は、一人だ。

もう、大丈夫かと問う声はない。隣を歩く姿も。

……買い物は、嫌いだ。

あの人のことを思い出してしまうから。

立て付けの悪い裏口から、家に入る。

「ただいま帰りました」

買ってきた野菜を籠ごとブリュツセ婦人に渡すが返事はない。

ため息を押し殺しながら外套を置きに部屋へ戻る。

すれ違う子供たちも、誰一人ルシエーラに声をかけはしない。

部屋も一人部屋だ。贅沢なようだが、誰もが嫌がるのだ。どうしようもない。

部屋に戻り、外套を脱ぐ。

クローゼットには2人分の服がある。

今はもういない人のものだが、始末することなどできるはずもなくこうしてしまい込まれている。

ルシエーラはあまり背が高くないので大人と子供のものようなサイズの違いだ。

今着ていた外套と揃いの外套に目をやる。

たった、一年間だけ。彼が隣にいたのはたった一年に過ぎない。

それでも残された思い出はこうしてどこまでも付きまとう。

忘れたくないから。忘れられないから。忘れては、いけないから。

ずっと、一緒だと約束したのに。

ルシエーラはもうすぐ16になる。そうすればこの孤児院からでなければならぬ。

子供たちはそのために早くから準備をする。

手先の器用なものは親方へ弟子入りするし、店を周り手伝いをして仕事を見つけ蓄えをつくる。

それが当たり前のことだったが、ルシエーラは何の計画もない。

以前は、彼と共にいるんなことを約束した。

二人で、暮らそうと。

ルシエーラは暑さに弱いから西の静養地で暮らすのが良いだろう、と。

彼女があこがれた、普通の家庭を作るための、たくさんの約束。

もう何も、叶うことはない。

彼と共に幸せな未来もすべて失われてしまった。

誰も彼女を雇おうとはしない。少なくともこの街にはそんな奇特な人間はいないだろう。

ルシエーラは、精霊の加護を失った人間だから。

第一話（後書き）

まだ何も始まっていません。

第二話

精霊の祝福に満ちたこの地において、ルシエーラは異端となっていた。

子供にもできる、ささやかな火を灯すことさえ出来ないのだ。もちろん風をおこすことも出来ない。

井戸から水をくみ上げることにも、大地を耕すのにも人より何倍も労力を使うことになる。

誰にでも与えられる加護を、彼女だけが失っていた。

彼を、ルシエーラを愛してくれた精霊を失ってしまったから。

彼に出会ったのは二年前。

一緒に過ごしたのは、たった一年だけ。

その一年で一生分以上の幸せを得てしまった。

病んだとき、癒えることの病だと告げられても。それでもルシエーラは幸せだった。

柔らかな木漏れ日の下、金色の青年が立っていた。

派手な人。それがルシエーラの第一印象だった。

金色の髪がとても長くて、綺麗だったので。高く売れそうだな、とも思っていた。

観察していることに気付いたのか、笑った青年の笑顔を見て関わってはいけなさと悟る。

なぜかは分らない。けれどとても性格が悪そうだと思ったのだ。

その予感はある意味はずれていたが、ある意味では大正解だった。

「うわ、可愛い。お嬢さん、おにーさんと結婚しない？」

……聞かなかったことにしよう。
一瞬でそう決めた。

この庭にいるのだから、孤児院への来客かもしれないとか。身なりが良いから支援者なのかもしれないとか。

考えなければいけないこともあったけれど、身の安全が一番。

十歳は離れていそうなのに、冗談とはいえいきなり言う言葉としては最悪だ。

怪しい趣味がある人間に目をつけられたらろくなことにならない。特に、それが貴族などであるなら。

これまでの経験を生かして瞬時に判断すると、側の友人にすべてを託すことにして背を向ける。

収穫した野菜をブリュッセル婦人に届けなければ。

夕ご飯の材料だ。食事が遅くなったら食べ盛りの身には結構辛い。

てくてくてくと普段の2割り増しで歩く。

走らないのは野菜が重いせいだった。

……ルシェーラはこの頃から体格には絶望的に恵まれていなかった。いっぱい食べて大きくなってやるつ。

現実逃避気味に決意を固めているときいきなり手の中から野菜が消えた。

「……あれ？」

落としたはずはない。目の前にも後ろにも、人はいない。

なのになぜ野菜が消えるのだろうか？

あまりに意外な事態に逃げていたことも忘れてきよるきよると周囲を探す。

前と上下左右。いや、上にはないと思うけど。

「逃げなくても良いんじゃない？」

………なんか聞こえる。聞きたくないけど。無駄に美声なのもむかつく。

さっきの青年が奪ったのか？ でも後ろに人はいないはず………そう思いつつ振り返る。

思った通り手の届く範囲に人はいない。
青年は、先ほどと同じように庭の木下に立っていた。
手には野菜を抱えて。

第二話（後書き）

しばらくは無駄に明るいです。

第三話

なぜ青年の手に自分が今まで抱えていた野菜があるのか。

目にもとまらない早業で奪い取っていった？ 無理がある。

精霊の力を借りても無理だろう。いや、使い手と呼ばれるほど精霊の力を借りることに長けた人なら可能なかもしれない。

その場合、なんでそんな人間がこんなところにいるかの方が問題だが。

精霊への祈願の声が聞こえなかったのも気のせい、ということにしたい。

「返してください」

心底関わりたくなかったが、まさか手ぶらで厨房に行くわけにもいかない。

なぜかわたたと変な踊りをしているレイラに任せたいけど、恨まれそうだし。

「いいよ。代わりにお嬢さんの名前、教えてくれる？」

につこりと笑って野菜をこちらに差し出している。

せっかく運んだ距離は0になるらしい。重かったのに。

絶対、教えないっ。

無言でずんずん近寄り、野菜を奪う。

至近距離で、視線が合う。彼の、金色の瞳と。

「ねえ、名前は？」

……金色の髪と、金色の瞳。

同色の髪と瞳。

私の髪は黒い。だから、瞳に黒の色はあり得ない。青だ。

同色の髪と瞳は、精霊の証なのだから。

レイラを見る、彼女の髪は青い。瞳は赤だ。

青年を見る。金色の髪、金色の瞳。

……うん。私の目はちよつとおかしくなってるらしい。

こんなところに実体化出来るような力の強い精霊がいるはずないし。誰かの守護だったらなおさら、精霊一人でいるはずはない。

そもそも国に数名しかいない重要人物がこんな孤児院の、しかも畑にいると思うこと自体が間違ってる。

最近暑かったからね、幻覚も見えるよね。

「ねえねえ、聞こえてるー？ なーまーえー」

幻聴も聞こえてる。休んだ方が良いよね。

せつかく野菜も奪い返したことだし、急ごう。

現実逃避しつつ、結論を出すと少し前と同じように背を向けようとした。

精霊の姿を見、言葉を交わすと言うことは冷静に考えればこの上ない栄誉ではあったのだけれど、このときの私はどこまでも混乱していた。

彼を精霊として崇めるには、最初の言葉があまりにもひどかったので。

後ろから伸ばされる手を無視し、言葉も聞こえないふりをする。

レイラも何か言ってたけど、精霊様に失礼はーとか認めたくない台詞だったので聞こえないことに決定。

立て付けの悪い裏口の扉に苦戦しているとまた手の中から野菜が消える。

またっ？ ムツとなって嫌みなくらい高いところにある顔を睨むとなぜか彼はうれしそうに笑った。

なぜそこで笑われるのか分らなくて首を傾げるとさらにうれしそうになる。

睨まれるのが好き、とかそう言う性癖なのだろうか。

精霊について深く疑問を抱きつつ、関わってはいけないという決心

を新たにした。

「荷物抱えたままじゃ、難しいでしょう？ 持ってあげる」
ここにこと笑顔の大盤振る舞いで告げられた言葉は正直助かったが、ここまで無視してきたのに都合の良いところだけ頼るのはどうだろう？

少し悩むけど、野菜はすでに彼の手の中だ。
とりあえず扉を開けてから奪い返そう。
そう決めて、とりあえず扉を開けることにする。

まずは蝶番の位置を直しドアノブを持って扉全体を少し上に押し上げる。

そうしておいて、カ一杯引く。

ちよっと力余って転けそうになりつつ、無事扉を開けることに成功した。

荷物を持ったままだところはいかない。

「ありがとうございます」

ぺこん、と頭を下げて手を伸ばす。

「どういたしました」

やっぱり笑顔のままの青年から野菜を受け取る。……小さいのを、1個だけ。

残りの野菜はがちり抱え込まれている。

「返してください」

やっぱり性格悪い。さっきの反応を鑑みるに効果はなさそうだけど、それでも視線は険しくなる。

「どこに置くの？」

帰ってきた返事は意外なものだった。運んでくれるつもりらしい。精霊に荷物運びをさせるのはさすがに良くないような気がするけど、ここでもめるよりはすぐ目の前の台に降ろしてもらう方が早そうだ。そう判断してブリュッセ婦人の側の台においてもらう。

あ、婦人が固まってる。

金髪金目は目立つらしい……。そうですね、一生見かけることもなさそうな精霊様ですものね。

でも変な人です。見なかったことにする方が良いと思うくらいにはそれに浮きまくってる。煤けた壁や軋む床が似合わないにもほどがある。

とりあえずお礼をいいつつ、途方に暮れる。

畑に戻つても着いてきそうだ。何をしたいのか分らない。でも聞いたら不味い気がする。

聞いたら最後、逃げられないような気がする。

……すでに手遅れのような気もするけど。

第三話（後書き）

手遅れです。

第四話

結局、逃げられなかった。

ジークと名乗った青年はルシェーラと共にいることを望んだのだ。契約、という形式を含んで。

それも、精霊の来訪に驚いて厨房まで訪れた院長の前で。

問いかけたのは、院長だった。藪をつついて蛇をだした彼女を恨むことにする。

名前もばれたし。隠す意味はないけど、なんだか意地になってたんで教えたくなかった。

お祝いをしなければ！ と当事者を置き去りに盛り上がった人たちが今は憎い。

変質者の犠牲になるのがめでたいのでしょうか。

確かに精霊と契約を交わしたとなれば一生安泰ではあるだろう。

普通よりずっとたくさんの方力を願えるし、噂では病を癒したり天候を変えてもらうことさえ出来ると言っし。

生活に困ることはないだろう。お城で召し抱えてもらうことも出来るだろうから。

でも、変質者……。

契約なんて人に置き換えれば結婚のようなものはず。

精霊は、好きになった人間の側にいてその生涯を守り、慈しむという。

愛情が存在するから、精霊の契約者が他に伴侶を得たという話はほとんど聞かない。

普通は、人も精霊を愛するらしい。

せめて、畑で聞いておけば良かった。

大人に知られる前なら、逃げられたかもしれないのに。先生たちも、当事者の意思確認を一番にお願いします！私の幸運を喜んでくれるのは分るんだけどね……。自分の浅はかさを後悔しつつ、笑顔以外の表情がないのかと罵りたくなるほど微笑んでいる青年から可能な限り離れる。

……笑顔でせつかく開けた距離を詰められた。もう一度今度は反対方向に逃げる。

あ、笑顔が消えた。

い、いま夏だよな？　なんで寒いのか？　寒い、怖い怖い。い。い。い。全身に鳥肌が立つ。なんか、怒ってるっぽい。泣きたくなるほど怖い。

なんでこの寒さに周りの人は気付かないんだろう？

半泣きになりつつ開けた距離を自分で詰める。

うん、臆病者と言うなら言えればいい。

でも凍死の危険と変質者の危険なら、前者の方が切羽詰まってると思う！

びくびくと見上げたら、笑顔が戻ってた。

同時に部屋の気温も戻っている。

気付かなかった他の人々の楽しそうな様子がうらやましい。

夏祭りにしか食べられないはずの氷菓子ができるとはしゃいでるレイラ。

私も普段なら小躍りして喜ぶだろうけど、凍死しかけた直後では喜べない。

まだ鳥肌立ってるよ……。さすってみる。あ、ちょっと落ち着いた？

私の現実逃避はあんまり長く続かない運命らしい。

頭の上に手が置かれ、声が落ちる。

もしかしくなくてもこの手は逃走防止ですか？

「なんで逃げるの？」

「に、にげてなんか、なな、なないですよ？」

口はまだ凍ってたかな、呂律が回らない。

でもここで肯定したらなんだかいろいろ終わる気がする。切実に
だつて声に温度がない。

一応笑顔だけど、笑顔だけ……。

「もしかして、契約したくない？」

声が怖いです。そう言いたい。言ってしまいたい。

言う勇氣はかなり足りないけど。

ここで頷いたらどうなるかなー。

本音を言えば、頷きたい。今後の生活の安寧とか将来を考えれば契
約するのが一番良いのは分ってる。

でも、変質者だ。

私は間違つても精霊に好かれるような性格じゃない。一応自覚はあ
る。純粹無垢な人を好む、って言われてるしね？

そもそも初対面だから性格に惹かれて、とかじゃないだろう。

でも容姿に惹かれたとかだと最悪だ。

私はまだ成長期前だ。多分。熱烈待望中です、成長期。

せめてあと10センチ。ううん、贅沢は言わない。5センチでも良
い。

いや、思考がまだ逃避をはかつてるけど。

成長期がまだなのが問題なのだ。この青年は少女嗜好なのだろうか。
だとすれば、立派な変質者だ。

いや、そこは問題じゃない。すぐくすぐく重大な問題だけど、いま
は置いておこう。

私が成長して立派な大人になったら彼はどうするのだろうか？

契約破棄とかは聞いたことがないけど、興味が失せた状態で契約だ
け残るといふのはぞつとする。

約束に基づいて嫌々側にいられるなんて冗談じゃない。

つて、思考がまだずれてる……。

そもそも変質者の側にいるということ自体の危険が問題。数年後に
安全になつても、それまでの期間が危ない。

「なんか、ひどいこと考えてる気がするなー」

髪を梳く指はとても優しく、幸せな気分になる。

無駄に綺麗な精霊だよなー。惜しいと思う。これで変質者じゃなければ良いのに。

というか、その背を寄越せといたい。思いつきかがみ込んでるのが悔しい。

私の背は彼のお腹くらいまでしかない。……成長期前だからね？

「沈黙は否定ということぞー」

なんか言ってるけど、無視無視。

いまは安全に契約から逃げる方法を考えないと。

5年もあれば確実に成長してるだろうから、そのあとにっしてことで時間を稼ぐのが一番良いのかな？

少女嗜好の変質者ならそれで興味なくすだろうし。

でも今すぐ契約しない理由聞かれたらどうしよう。先生たちも当時に者を全力で放置して盛り上がってるし、ここで言い出すのはかなり勇気がいる。

先延ばしにする理由なんて普通ないよね。

変質者だから、って正直に言ったら今日が私の命日になりそうだし。死因はこの真夏に凍死。……嫌だ、それは。

「聞いてるー？ ルシェーラ？」

呼ばれて、顔を上げる。そこには真顔の精霊がいた。

触れそうなほどに近いし、怖いし。ど、どうしよう？ 一瞬でパニックに陥つてると、触れそうだなーと思った顔が本当に触れた。

顔というか、口？ 唇、だよな……。鼻の方が高いのになんで口が当たるかな？ 避けたからか。避けるよね、普通。でも避けるなら

口も避けようよ。

そもそも顔を近づけないで欲しかったけど。これじゃあ、キスみたいになってるよ。

「契約完了ー」

笑顔になった精霊がなにか言ってる。

契約って、精霊と人間の契約の話だよ。いまここで賃貸契約の話とかしてた気配はなかったし。

契約というと、契約のキス？ 結婚式にキスするのと同じだよ。

……………キスみたい、じゃなくてキスだったんだ……………。

呆然としてるとレイラが抱きついてきた。

「おめでとう！ ルシエ、幸せになってね！」

さっきまで放置されてたのに、いまのキスだけはしっかり目撃されてた。

しかも全員に。

……………いじめですか？

祝福らしい声が呪いの響きのようだ。

私の反応がなくても誰も気にしない。

もともと自分の考えに浸りすぎてすっかり反応しそびれることが多かったから、今回も流されたらしい。

普段からリアクション過多にしていれば良かったのだろうか……………。

第四話（後書き）

後悔先に立たず。

第五話

お祝い、と称する頭が痛くなるような騒ぎが続く食堂をあとに私は自室へと戻った。

滅多にでない甘いデザートに未練はあつたが、実際に頭が痛いのだ。残念ながら私はあまり丈夫ではない。暑くても寒くてもすぐ動けなくなる。

熱中症に風邪なんかが主な原因だが、草に触ればかぶれるし、腕力も乏しい。体力に至っては一日子守をしただけで過労で熱が出る。それをよく知るからこそ、私が一人で生きていけないと判断し、保護者となるであろう精霊を歓迎してくれたのだろう、多分。

置いてきた（こっそり逃げてきたとは言わない。怖いから）精霊が将来設計を院長相手に語つてた気がしたけど、私は何も聞いてない。地の精霊から譲り受けた宝石を売って、近くに新居を構えるつもりだなんて聞いてない。ないったららない。

でも、ろくな手伝いも出来ない子供が減れば、先生たちはきつと楽になるだろう。

寝台に倒れ込んで部屋の天井をみる。どんな景色より、一番長く見続けたのはこの天井だ。

それくらい、私は横になつている時間が長い。

薬代も結構かかつていと思う。つまりは、完全なお荷物なのだ。

その上ろくにしゃべらないとなれば、かわいげなど皆無だろう。

分っているなら愛想を振りまけばいいのだろうが、疲れ切っているときに笑うことはおろか、話をする余裕などなくて。

倒れそうなのを隠すだけでも精一杯だった。

同室のレイラはいつでも優しく、熱にうなされる私をいつも心配してくれた。

夜中に咳き込む私のせいで睡眠を邪魔されても、一度だって怒らなかつた。

彼女の優しさに私は何も返せないのに。

出て行くのが、一番良いのかもしれない。

けれど一人で生きる術はまだなくて、途方に暮れる。

もつと大人になれば、かろつじて得意と言える仕立てで生計を立てられるかもしれないし、うまくいけば店番に雇ってくれるような店も見つかるかもしれない。

けれどルシエーラは14になったばかりだ。家族さえもないのだから一人では家を借りることも、仕事をする信用も得られない。

出て行くのはいい。精霊と一緒に信用は得られるだろうから、仕事も出来るだろう。

名前以外何も知らない相手と一緒に暮らす、というのが一番問題だが。

ずっと、愛されたいと、願ってた。

院長先生や先生たちはとても優しくあつたけれど、それでも、自分だけに特別な感情をくれるわけではなかつたから。

同じ境遇の子供と寄り添つて、それで僅かな温もりを得ながら。そうしながら、寂しさを埋めていた。

いつか大人になれば。そうすれば誰かを愛して、誰かに愛されて。たくさん子供を生んで。

自分だけの居場所を手に入れて、幸せになれる。誰かを、幸せに出来る。

そう、願っていた。

でもその相手が変態というのは困る。

いずれ確実に心変わりするであろう相手を愛してしまえば、辛いだけだろう。

思考がまとまらない。天井がぐるぐる回っている。

本格的に熱が出始めたのかもしれない。

金色の双眸が4つに見える。

「……金、色……」

思わず呟く。部屋の天井はそんな悪夢にでも出そうな奇異な内装ではない。

さっきまでは普通の天井だったはず。木目はちょっと目に似てて怖いときがあるのだけど、少なくとも金色ではない。

色を塗るような経済的余裕があるはずないのだから。

「大丈夫？」

額に触れる手はひどく冷たい。精霊には体温がないのだろうか。血も通ってなさそうだし。ぼんやり考える。

「ひやくて、気持ちいい……」

とりあえずいまは便利だから良いことにしよう。

冷たかった手がじわじわと私の体温によって温もっていく。

それを惜しみながら、気持ちの悪いめまいが収まっていることに気付く。

視界も鮮明になっている。

「どっつ？」

笑う、精霊。契約を交わした精霊ならば病を癒すことも出来るといふ話を思い出す。

彼が、癒してくれたのだろう。

「……大丈夫です。ありがとうございます」

彼の手が温かくなったのは私の熱が伝わったからだろうか。それとも、冷たいと思ったのは私が熱かったからに過ぎないのか。

私は嬉しそうに笑う青年について名前しか知らない。それさえ、私が問いかけたものではなく。

彼もそうだろう。私は結局名乗らなかった。ただ、他の人との会話から互いの名前を知っただけの存在。

それでも、彼の笑顔は優しい。その手も。

「私は、ルシエーラといいます。……あなたのお名前を、教えてくださいますか？」

今更、かもしれない。知っているだろう、というかもしれない。

けれど私は私の口から彼に名前を告げなかった。彼の口から、私に名前を教える欲しかった。

その望みはいままでで一番綺麗な笑顔と共に叶えられた。

第五話（後書き）

部屋に戻れないレイラさんのことも思い出してあげてください。

第六話

結局、私は16になるまでは孤児院に留まることになった。

レイラと同室だった部屋をジークと二人で使うことにはなったけれど、夫婦のようなものだから、と説得されてしまった。

何よりレイラが次の日には荷物を抱えて空き部屋に移ってしまったので、引き留め損ねてしまった。

いままでさんざん迷惑をかけたから、やっと開放されると思ったのだろう。

……笑顔で心底嬉しそうにしていたので、心が痛んだ。

ちなみにジークに少女嗜好はないそうだ。疑問は残るけれど、信じることにしている。

……その方が身のためだ。

ジークが来てから、私の生活はずいぶん変わった。

普通の人が精霊に祈願し、借りられる力はそう強くはない。

けれど、ジークなら普通に願うだけでは叶わないことでも叶えてくれる。

病の子供を持つ親や、高価な作物を育てる人はこぞって彼の力を求めた。

ジークは決まって私が望めば、と答える。

いちいち私に言わないで、自分で決めて、といったときにはすべて断るといふ暴挙にでた為にも二人で対応することになってしまった。

そうなれば、孤児院の仕事を手伝う暇がなくなってしまうのも自然な流れだ。

その分、孤児院への寄付とジークへの謝礼が増えていくので、助かってはいる。

二人、手を繋いで歩く。

長い距離を歩くだけの体力のない、私の手を引くためだとそう、自分に言い聞かせる。

そうしないと、手を振りほどいて走って逃げ出したくなるので。前にやってしまったときは道の半分もいかないうちに倒れてしまった。

どうやって帰ったのかは、思い出せない。

ただ、ジークがむやみに嬉しそうだったので、私にとってはるくでもないことは確かだ。

……思い出したくない記憶ばかり増えてるような気がしてならない。指を絡めるのはやめて欲しい。切実な願いだけど、見上げたら

「ルシエ、顔赤いよ？ お土産に、リングでも買ってかえろっか！」意味不明な言葉で無視された。いい笑顔付き。

ジークはいつでも笑顔だ。私は彼が怒るのをあまり見たことがない。……最初の頃、私が逃げるたびに笑顔が引きつってたけど。

「ジャガイモとにんじんとタマネギを頼まれてるから……持てないと思う」

だから！ 手を離して！。ぶんぶん手を振ってみたら体が浮いた。「重そうだねえ。じゃあ、ルシエごと運ぼう」

意味不明すぎる。そんな笑顔で言う台詞ではないと思うんです。降りしてー。

でも言わない。言えない。地上から一メートル離れて子供抱きされてたら、恐怖でそれどころではなくなる。

ここで離されたら、地面に真っ逆さま。怖すぎる。

落ちないように全力でしがみついているうちにジークは野菜を買い込んでいるが、重くないのだろうか。

重そうだと言ったのに私という荷物まで増やしてどうするんだろう。

「荷物持つよ？」

だから降ろして、と言外に含めて見つめるけれど。こつこつ意志はだいたい伝わらない。

無視してるんじゃないかと思いたいけど、どうだろう。

もういいや。肩に頭を置いて寝てやる。一人で荷物運びなんて面白くないことをしてれば飽きて降ろしてくれるだろう。

「ぐー」

寝てますよーとアピールもしてみた。

「はいはい」

妙に楽しそうに放置される。

「ぐーぐーぐー……！」

増量してみたけど、喉が痛くなっただけだった……。

第六話（後書き）

双方向一歩通行な幸せはそろそろおしまいです。

第七話

濁流って言葉をご存じでしょうか。

それがそのまま実体化したような川が目の前にある。

言葉通り、完璧に濁った、流れだ……。

ちよつと全力で現実逃避したい気分です。

目の前もですが、私の座ってる位置的にも。

誰かの腕がお腹の上に回されているのは気のせいだと良いな。

私が誰かの上に座ってるのも多分きつと幻覚。

背中とかぬくい気がするの、きつと日が当たってるのですっ。

……周囲に人目がないのだけが救いだけど、夢に見てうなされそう。

むしろうなされる。いま現在。のたうち回って逃げだしたい。

切実な訴えですが、聞いてくれる人はいない。いるのは精霊だけ。

精霊つてもつと幻想的というか、人間離れしてるべきだと思う。

でも、在り方を聞いてしまったのでそんなのは夢物語だと分つてし

まった。

夢がない。むしろ夢だった？

魂が肉の器を得るか、自然の力を器にするかだけの違い、とか……。

自然にある力が集まってそこに核となる魂が入れば精霊となるらし

い。だから、基本的には人と大差ないという。

食欲とか物欲か、たいていの欲が希薄だから、行動が全く違うよう

に見えるだけらしい。

……欲がないって、大きな違いだと思うんだけど。

そう言ったら、ないわけではないと笑われた。ジークは本当によく

笑う。

でも最近はその笑い方で感情が分るようになってきた。

便利なんだか厄介なんだか、分らない。意外と性格悪いんだよね。このときは、多分私を子供扱いして笑ってた。

もの知らずの子供を生暖かく見つめる、大人の笑い方、だ。でも私に自分が何を知らないのかなんて分るはずもなく。

そんな風に笑われても、何も言えなくて。

仕方ないので、丸1日無視した。

紅茶とプリンはとても美味しかったので、多分私の勝利だろう。

……そういうことにしておこう。

ああ、もう。

早く帰りたいな……。

背後の存在は無視するとしても、川を見ているだけというのはなかなか辛い。

働いてくれてるジークには申し訳なくて言えないけど、ぶっちゃけ暇なのだ。

働いてるはずだけどぱっと見は二人で座ってるだけだしね。

大雨で増水した川が氾濫しないように、水量調節中なんだけど……。

昨日大雨だった。今朝になって頼まれて急遽来たのは、いい。

でもどこもかしこも濡れてて、座るに座れなかった。

結果。

宙に浮いてる誰かさんの膝に……あう。

思い出してはいけない。気のせい気のせい。

こんな恥ずかしい体勢でろくに身動きできないとか。いったいなんの拷問だろう。

泥の上でも座れば良かった。洗濯は嫌いじゃないし。

ああ、でも濡れたところに座り込むなんてしたら確実に風邪を引くか。

服は乾かしてもらえばすむけど、座ってたらずっと濡れるしね。

……あれ？

「ねえ？ ジークは地面乾かしたり、出来るよね……」
多分私の声はいつもよりずっとずっと低かったと思う。

だってだって、この数時間の羞恥耐久レースは完璧な無駄だったってことなんだから。

「できないよ？」

ああ。表情は見えないけど絶対わざとらしい笑顔だ。見えなくて良かった。

見てたらきつとお昼ご飯入りのバスケットを投げてたと思う。
ぶつかっても怪我一つしない相手に投げてても、無駄なのに。
むしろご飯がなくなつて、私が悲しいだけかも。

「うそっ」

ぎゅーっつと手をつねる。ポイントはいっぱい摘んで抓るんじゃないかと、薄く摘んで抓ること。その方が痛いから。

残念ながら、これ以上動くし落ちそうで怖い。

とりあえず可能な限りの反撃をしておく。

「嘘じゃないって。せつかくルシエと堂々とくっつけるのに、離れるようなことはできないよ？」

……堂々とそんなことを、言わないでほしい。

別にくっつくのが嫌で仕方ないなんて言ってないし。

単に逃げ場がないのが耐え難くなってきただけで……。

「これなら逃げられないし」

……3日間無視し続けた私は悪くないと思う。

ケーキの誘惑もはね除けたよ！

第七話（後書き）

田舎のーラブ。

第八話（前書き）

編集しても他の方のように（改）と表示されないようで困っています。

第八話

まどろみから目覚め、ゆっくりと上体を起こす。

このベッドは以前のものより、遙かに柔らかく暖かい。

ほとんど起きることの出来なくなった私のためにジークが用意してくれた。

それよりも、側にいてくれた方が良かったのに。

そう、いまジークは側にいない。

薬を手に入れるために連日飛び回っている。

もう幾種類の薬を飲まされたかも覚えていないくらいだ。

冬の間は数回寝込んだだけだった。

春になってからは、起きていられる日の方が少ない。

苦痛はない。薬が効いているか、ジークのおかげだろう。

精霊の力でも、癒せない病だというのに、苦痛は取り除けるらしい。なんでも、病巣があれば取り除くことができるのに、体自体が変質してしまっているので手の施しようがないという。

それでもなお、薬を探してくれているが……進展がないのが現状だ。

ジークの泣き顔を見たのは初めてだったな。

あんなにいつも笑ってたのに、いまはもう全然笑ってくれない。

そろそろ笑顔を忘れてしまいそうだ。

彼のせいではないのに、自分が悪いのだとそう言って嘆いてた。

体調を崩すたびに、癒してくれた。

熱が出るたびに冷ましてくれたから私は普通に生活できた。

疲れていれば、手を引いてくれた。そうすれば体が軽くて、遠くにも出かけていけた。

全部、本当はいけないことだった。

私は丈夫ではなかったから、熱も疲れも普通のことだと思ってた。でも病はゆっくりと進行して、気づいたときには手遅れになっていた。

死ぬのは嫌だ。怖いとも思う。

でも一人寂しく、苦しんで死んでいくよりずっといい。

病を癒せなかったことをジークは悔やむけれど、私はジークのおかげで幸せなのだ。

思い出も、優しさもぬくもりも。たくさんものを貰ったから。

本当は未来もずっと続けば良かったのだけど。それでもこれ以上はないくらい幸せだから諦めることが出来る。

……なかなか帰ってこないけど。

あまりにも帰ってこないし、帰ってきたら来たで薬草のフルコースとかできそうな状態なので、それが地味に辛い。

苦しいえぐいし渋い。なぜか時々辛かったり酸っぱい。でも甘いのはない。

必死なのは嫌というほど伝わってくるのでがんばって飲むけど。

でも、ああもたくさんだと混ざり合って良くないんじゃないかな！。本人にはとても言えないけど、心配だったりする。

そんなことを考えながら、少し笑ってしまっ。

うん、私はやっぱり、とっても幸せです。

たとえば、明日には終わるのだとしても。

第八話（後書き）

夏に出会って、いまは春です。

第九話

帰ってきたジークはずっと側にいてくれるようになった。

さすがに、身を起こすことも出来なくなった私をおいていく気にはなれなかったようだ。

もう、時間がないと互いに分っていた。

ずっと、側にいて飽きることなく髪を梳いてくれている。優しい動き。

長い指でそうやって触れられるのはとても気持ちいい。

もう、視界がかすんで至近距離にいるはずの姿さえ、はっきりとは見えないけれど。

側にいるのが、分るから。

寂しく、ない。

なんて幸せなんだろう。

小さい頃から願ってたことがすべて叶ったから、終わりなのかな。

こんなことを言ったら、きっと怒られるのだろうけど。

夢が叶うなんて幸運に恵まれる人なんてほとんどいない。

血が滲むほど努力しても、泣いても叫んでも。叶わないことの方が多いはず。

それを考えればこれは、大往生っていうのだと思う。

けれど、ジークにとっては違うらしい。

ずっと元気になったら遊びに行こうね、とか。

快気祝いには美味しいものをいっぱい食べさせてあげる、とか。

泣きそうな声で、それでも治ると言い続けていたのだけ。

「ごめんね、ルシエーラ」

何度目かも分らない言葉がかけられる。

まともな返事はしてあげられない。

その力もなく、声を出そうとしても掠れた吐息になるだけだから、余計に苦しませてしまう。

「……い、い」

本当はもっとたくさんいたいことがあるのだけど。

何度も繰り返したことから伝わっていると信じておこう。

「ごめんね。許してくれとはいわないけど……どうか、幸せになつて」

最後に聞こえた声は、いつもとは違うもので。

その声の響きと、死にゆく私に幸せになれという言葉の不可解さ。

聞き返したかったのに、消えていく意識を取り戻すことは出来なかった。

……すべてが、終わってしまうまで。

意識が覚醒する。

さっきの言葉の意味を考えながら、周囲を見回す。

誰もいない室内。もともと殺風景な部屋だが、無人だと余計に寂しく感じる。

そして、見回している自分に気付く。

棺桶に片足どころか首まで入ってるような状態だったはず。むしろ蓋を閉めるだけ状態だったかもしれないが。

そんな私に辺りを見回す力が残っているはずがないのに。

視界も、普通に良好だ。

起き上がることも出来る。いや、外に出て走ることさえ出来そうだ。

信じられない。が、実際そうなのだから仕方ない。
どうしてだろう？

癒すことは、出来ないといった。

癒せるならもつと早く癒していただろう。

あんなに悲しそうな顔は、しなかつただろうに。

なぜ、ジークはいない？

癒せたなら、側にいてくれるはず。

まさか繰り返ししてた快気祝いの準備にいったなんていわないだろう。

その場合は一ヶ月くらいは無視しよう。

こんな時に側にいないなんていくら何でも薄情……は違うか。

愛がない？ うーん、なんだか微妙に違う。

女心が分ってない？ そんな感じかな、うん。

とにかく、側にいてくれるべきだと思う。

じわじわと這い寄る不安から必死に目を逸らす。

癒せるなら、どうしていままで癒さなかったのか。

癒す気がなかったらな、なぜ今更癒すのか。

どうして、側にいないのか。

最後の言葉の意味は、何？

知りたくない、気付きたくない。

早く、戻ってきて。

奇跡が起きたのだとでもいって、笑ってみせて。

一人に、しないで。

精霊は普通に死ぬことはないけれど、不滅ではない。
長い長い時間を存在し続け、自我が希薄になり自然に溶け、力に還
るか。

あるいは。

存在を保てなくなるほどの、力を使うか。

早く、帰ってきて。

この不安をかき消してほしい。

もう一度、あの笑顔を見せてください。

第九話（後書き）

次回はさらに暗いです。

第十話

夏の強い日差しは苦手だ。

もつとも、冬の凍るような寒さも決して得意ではない。

暑さも寒さも。些細な変化にさえ耐えきれない脆弱な体。

じわじわと体力を削り落とす暑さの方が、より苦手というだけ。

満足に汗をかくことも出来ず、体温が上がりすぎて倒れたことも数え切れない。

けれど。もう、倒れることはない。

強い日差しの中、失ってしまった青年の姿を探し回ったが連日の搜索も、疲労こそ積み重なるものの致命的なことにはならなかった。以前なら確実に倒れていると、自覚出来るほどに身体を酷使しても、疲れるだけで。

自分が健康体なのだと、思い知った。

彼が、どれほど癒しても。他者と同程度の頑健さは得られなかったのに。

いまは、それがある。

生まれ変わったような身体。

それが、どれだけの奇跡なのか。

どれだけの力を費やせば、成し得るのか。

誰を、犠牲に、したのか。

どんなに認めたくなくても、分ってしまう。

側にいない彼。

幸せになれと、告げた。

私の'幸せ'すべてだった人を失って、どうやって幸せになれというのだろうか？

どんなに泣いても、涙をぬぐう指はもうない。

呼びかけても、返る優しい声は聞こえない。

ああ。

これが、罰なのだろうか。

彼は長く生きる精霊だから。

最初から私の方が先に死ぬのはわかりきったことだろうと思ってた。その覚悟は、あるはずだと。

置いていくのを当たり前にして、彼の悲しみを顧みなかった。

その、罰。

私だけが幸せに終わることを願って、彼を苦しめただけだった。置いていかれる孤独も絶望も、何一つ知ろうとせず。

でも、ならばどうすれば良かったのだろう。

死にたくない、もっと一緒にいたいと泣いていれば良かったのだ。

ろうか。

そうやって別れを互いにとって耐え難い傷にしていれば。きつと、共に果てるくらいの選択しか見いだせなかっただろうに。

それとも彼は、それを望んでくれていたのだろうか。

分るときはないのだろうか。

それでも少しだけ。

こんな苦しみを彼が感じずにすんで、良かったとおもった。

私が彼に与えるかもしれないなかった苦しみなら。……受け入れよう。

痛みも苦しみも、すべてが愛情からもたらされるものなら。

この絶望すべてが、あなたを好きだった証。

あなたを失った世界で、あなたを想っていきましょう。

そんな決心をあざ笑うかのように。

前途は多難どころか五里霧中でも、もう少しマシだったかもしれない程度には、茨の道だった。

第十話（後書き）

どん底だと思ったら、そこに奈落の口が開いてたようです。

第十一話

病から最初に与えられたのは喜び。

回復したことへの祝福。

そして、次には失望。

契約を交わした大切な精霊を失ったことへ。

元々、大多数の人間にとって孤児が生きていようが、死んでいようがたいした違いなんてない。

私が生き長らえたことを喜んでくれた人も、精霊を失ったことを知れば手のひらを返すように離れていった。

それらは普通に予測出来たことで。

たいした感慨は沸かなかつた。

私という個人を見てくれたのはジークと、孤児院の少しの人々だけだつたから。

その他の人から、'精霊の契約者'として利用するだけの存在と見られてることなんて、はじめから分っていた。

これからは普通に孤児の一人として扱われるだろう。

これからは孤児院の手伝いも増えるだろうし、何より独立への準備を始めないといけない。

ジークが残していったものや贈ってくれた装飾品はすべて大切にしまい込んでいる。

彼の優しさや二人の思い出を売るようなマネはできないし、使うには喪失の痛みはまだ生々しすぎるから。

クローゼットの中の服でさえ、見るたびに共に過ごした時間が脳裏をよぎり心が痛むのに。

そうして、時は流れていく。

けれど喪失を埋めるよりも早く、さらに失われてしまったものが判明する。

ルシェーラがいると、精霊の力が借りられない。

ルシェーラ自身が力を借りようとした場合はもちろん。

彼女がいれば、他の者もどれだけ祈願しようともささやかな助力さえもらえない。

継続して借りられるはずの力でさえ、緩やかに失われ消え失せる。

精霊に頼んで熾された火を、移した竈の火さえも消えるという有様だ。

彼女がいるだけで、著しい不便が起こる。

最初は戸惑い、驚くばかりだった人々もルシェーラがいることが元凶だと知れば一様に彼女を排斥した。

契約し、加護を与えていた精霊の命を奪って生きながらえたから。だから他の精霊の怒りがあったのだと。

そして自分たちにも怒りが向けられることを恐れ彼女を排斥する。実際に彼女がいれば迷惑を被るのだから、庇う者などなく。

迫害されないだけ、マシだと思っしかない。

それに数少なかった友人は、近寄ることそなくなつたが悪意ある振る舞いも見せなかった。

それだけで、十分だ。

だが、この街で独立して生きていくことは不可能だろう。

唯一の救いは、領主の判断で王都には存在を知られていないことだろうか。

精霊の契約者などという貴重な存在を王に知られれば、その力を奮わせるために王都へと連れて行かれていただろう。

それでは自身の利益が乏しいと判断し、存在を秘されていた。

王への貢ぎ物としては良いだろうが、わずかな名誉よりも手元で使う方に価値を見いだしたらしい。

つまり、街から出て他の地へ赴けば誰も彼女を知らない。

それでも旅費などの問題や、精霊の力を全く借りられないことなど問題は山積したままだったが。

第十二話

冬の足音が聞こえる頃、ルシエーラはやっと借りれた小さな小屋に移った。

ほとんど家具もない、ぼろぼろの部屋に小さく重いため息をつく。朽ちた壁は外を伺うことさえ出来そうな有様。

吹き込む風もすきま風というよりは吹きさらしの屋外のように。

その上、町を出ることも孤児院から離れることも出来ず、すぐ側に留まることになってしまった。

路銀の不足だけではない。

この町を離れて見知らぬ町へ行けばルシエーラに残るのは精霊の力を全く借りることの出来ない上に、他者の祈願を邪魔するという事実だけ。

この町だからこそ、疎まれこそすれ、迫害だけは受けずにすんでいるのだと……。

ルシエーラを引き留めたのはレイラだった。

どこまでも優しい彼女はかつての友人が苦しむのを見過ごすことが出来なかったのだろう。

人目を忍び、こちらを見ることさえしないままに。それでも忠告をくれた。

思い出の残る町から逃げることはかり考えていたルシエーラが考えようとしなかったこと。

それを突きつけられ、結局ルシエーラは町を出ることを諦めた。

慌ただしく住居を探し……迷惑をかけないことを何度も何度も約束し、それでも周囲にすむ人間の不快感から一室を借りることは不可能で。

独りにもかかわらず小さな小屋を借りることになってしまった。いくら橋のたもとの小さな小屋とはいえその分賃料も高額になり。かろうじて隣の町でようやく受けることの出来た仕事だけで生きていくことの困難さが思いやられる。

片道五時間かかる町で、その町の住人でもないのに仕事を探す。そんな奇妙な見知らぬ人間に仕事を任せてくれるような人がいただけありがたいとしかいいようがないけれど。

はじめの頃は持ち逃げを警戒したのだろう。仕事を受けるのに保証金まで請求される始末だった。

いまは数品をまとめて頼んでもらえる。その分納品日時も長くしてもらえるので毎日のように往復しなくてすむ。

多少値引かれているのは解っているが感謝こそすれ、文句などありはしない。

また小さなため息を漏らし、それでもここで生きていくための準備を始める。

端切れを集めて縫った布を粗末な寝台横の壁にかけ、せめて睡眠時だけでも風が直接当たらないように。

大工仕事が出来るようなら壁自体を直す方がよいのだろうが、この際仕方ない。

壁の隙間から明かりが入って、布がよく見えるから。仕立てはきつとやりやすいはず。

そう、前向きにとらえることにする。

そうでもしないと、泣いてしまいそうだった。

もしここに、ジークがいれば。
あり得ないと解っていて、願うのはいつも同じこと。
独りでは耐えられないことでも彼さえいてくれれば。
何度も何度も繰り返す夢想。

きつと、彼がここにいたら。

こんな場所にいるのはふさわしくないと。
立ち去ることを望むのだろうけど。

ああ、でも。

一人きりの時間はそう長くないだろう。

この寒さなら。

眠ったまま目覚めなくなる日もきつと遠くない。

彼がくれた命だから、無駄になんてできない。
可能な限りの努力をしたあとなら。

許して、くれるでしょうか。

第十二話（後書き）

新居は戦後に橋の下とかに建てた小屋。（漫画などのイメージで）

第十三話

夢はいつも優しい。

それは逃避なのかもしれないけれど。

過去を思い返すように繰り返しなぞる夢は同時に。

覚醒時にいつまでも癒えない傷を決る。

二度と醒めないと思っていた眠りから醒めたあのと時と同じように。独り目覚めるのに慣れるのはいつのことだろう。

小さな部屋いっぱい満ちる、明るい光に落ち込みながら、それでも着替えて食事にする。

ルシェーラは食事にはほとんど関心がない。甘いものや果実は好きだが、そんなものが今の生活で手に入るはずもない。

朝食はわずかな野菜が入った薄い塩味のスープに日持ちするよう硬く焼いたパンが少し。それだけだ。

ささやかなものだが、食べられるだけ感謝しなければならない。

このときばかりは食が細い……いや、素晴らしく燃費のいい身体に感謝する。

誰かさんは小鳥とでも張り合いたいのか、とかいいつつ呆れていたような気がするが、実際便利だし。

猫舌なので、暖める為の火も少しでいいのがいい。さすがに夏は痛ませないためにすっかり火を入れる必要があるが、今の時期なら大丈夫だ。

今日は暖かいが、この時期は鍋の中のものでさえ時々氷がはる。ルシェーラは自分が凍死してないことの方が不思議になりつつある。

「……………あれ？」

独り言が漏れる。

今日は、暖かい。だが、日差しが入って部屋の中が明るいくらいだ。つまり、快晴。

普通、晴れた日の朝は寒い。今日のような天気なら、床に霜が降りてても驚かない。

もちろん昼近くなれば暖かくなるのは普通だが、寝坊もしていないことだし。

気付は今日はすきま風も感じない。

ゆっくり部屋を見回す。昨日と何一つ、変わらない部屋。

おかしなところはない。

だからこそ、この室温はあり得ない。

「……ジーク」

彼が、いたなら。

精霊である彼なら空気を暖めることも風を入れないようにすることも出来るだろう。

けれど、彼は失われて。

もし、いるのなら姿を現さないはずがないのに。

それでもわずかな希望を込めて名を呼ぶ。

返る答えは、ない。

食事を中断し、扉を開く。

異常気象で外が暖かいという可能性の確認のためだ。

普通に寒かったので慌てて閉める。

そして部屋の中は流れ込んだであろう外気に変化することなく暖かいままだ。

不思議な事態に混乱する。

自分の感覚がおかしくなったということはないだろう。外は寒いし。部屋が急に保温性抜群になったはずもない。隙間から漏れる光はか

わってないのだから。

自分でも部屋でもないとするれば、それ以外の存在……精霊を考えるが、ジークはいない。

彼以外に存在する精霊はルシエーラに力を貸さないし、ここまでのことを成す力はないだろう。

彼と同じくらい力のある精霊でもない限り。

「……誰か、いますか」

一応念のために問いかける。

傍から見ると独り言だ。おかしくなったのかと思われそうだ。そんなことを考えるが。

目の前に人影が現れたのをみて。

そして、その姿が黒髪。……黒い瞳を持っているのまで確認してパニックを起こしそうになる。

滅多にいないはずの実体を持てるほどの精霊。

それが目の前にいるというありえなさ。

それを目にするのが二人目というのはどれだけの確率なのか。

思わず遠い目をしそうになるが、現れた青年の意図を考え悩む。

一番あり得そうなのはジークが消えてしまったことへの恨み言や復讐だろうか。

似た年頃に見えるし、友人だったとしたら消える原因になった人間に恨み言の一つでもいいと思うだろう。

それにしても一年以上経過しているのが不思議だが、精霊の時間感覚ならたいした時間でないのかもしれないし。

復讐なら復讐で、ルシエーラには歓迎するべき事態かもしれない。

そう考えて落ち着くべく深呼吸を繰り返す。

椅子を勧めようにも家具のほとんどない部屋の中。

立たせたまま話をするのも申し訳ないが、こちらが食事中というの

もどつだろつ。

まさか本当にいるとは思わなかったというのが本音だが、自分で問いかけておいて返事があったからといって非難することも出来ない。行儀の悪さは置いておいて、このまま話を聞かせて貰うことにする。

「あの、どちら様でしょう……………」

いろいろと、間違つた質問のような気もする疑問が多すぎてどうしていいか解らなかつたので、一番基本的なことからはじめてみた。

第十三話（後書き）

進まなくて悩んでたら寝てしまいました。

第十四話

青年はレオンと名乗った。

そしてそのまま沈黙が落ちる。あまり社交的な方ではない様子です。空気の重さが辛い。出来れば名前だけでなく用件も言ってほしいというのは高望みですか、そうですね。

いや、聞けば返事はあった。姿を現してくれたし、名前も聞いた。ならば、用件を聞けば答えてくれる可能性はある。食べかけの朝食の所在に困りつつ、とりあえず話を済ますことにしよう。

この空気のなか食べる根性には恵まれていない。

「どのような用件でいらっしゃったのでしょうか」

青年は、何もないとところに腰掛けるようにして向かい合っている。背が高いので座っても見下ろされる感じがして、怖い。

顔立ち自体が冷たい感じなのでなおさらだろう。

「ジークに頼まれてきた。おまえが幸せそうなら、そのままそっとしておいてやってくれ、と。そうでないなら、伝言を伝えて欲しい」と

.....。

ジークは。

彼がいなくて、私が幸せになれると思っていたのか。

笑い出したいような。

大声で罵りたいような。

泣きわめきたいような。

そのすべてで、全部違う感情が一瞬荒れ狂うが目を閉じてやり過す。

それらを向けるべき対象は目の前の彼ではないのだから。

ため息をひとつ。

落ち着こう。伝言を聞かなければ。

幸せなんて、あり得ないのだから。伝言を聞く権利はあるだろう。

「伝言を、聞かせてもらえますか？」

伝言を聞いたことに後悔はない。

いろいろな常識や未来が変わったが、もう一度幸せになる可能性が手に入ったのだから。

それがどんな苦難の連続でもきつと平気。

……孤独より辛いものはきつとないから。

小さな部屋の中のを処分する。

受けていた仕事は完遂させて。

傍らには、レオンがいる。保護者代わりに付いてきてくれるらしい。私を気に入ったといっていたが、ジークの友人なのだから彼に何か頼まれていたのかもしれない。

傍らにいるとはいっても他の人には見えないし、実体化は出来るだけしないように頼んである。

精霊と共にいると目立つので。

これから長い旅になるのだ。目立たない方がいいだろう。利用されるのも、引き留められるのもお断りしたい。

私は、ジークに会いに行く。

彼は力を失い。長い長い時間をかけて力を回復させているという。再生が、いつになるかは解らない。

それは人の一生よりも長い時間が必要だという。

それだけなら、遠い将来彼が幸せになるように祈るだけで終わるしかなかったのだろうが。

伝言でもたらされたのは、私自身の変質を告げる言葉だった。

私は精霊の加護を失ったのではなく。

ジークの力をあまりに多く注がれたために精霊とほぼ同じ存在となつてしまつているのだという。

同質の存在が祈願しても届くことはなく。

周囲の祈願も、強い精霊、がいることでそちらへ流れて。

、強い精霊、と見なされる私が何もしないことで、周囲からは精霊の助力が失われているように見えたのだという。

それでも、このまま器である肉体を維持していれば私は人として生き、死ぬる。

力を自覚し、器を変質させてしまえば……彼らと同じように一時期実体化して得ているだけの器に変えてしまえば。

私は、完全に精霊と同じ存在になるという。

そうすれば、いつかジークに会える日が来る。

悩んだのは、ほんの少しの時間だけだった。

第十四話（後書き）

短い…。

第十五話

力を自覚してしまえば、あとは早かった。

祈願するのではなく、望むだけ。

それだけで様々なことが可能になった。

とりあえず、火を熾すのに一時間かかることはもうないだろう。

摩擦で火を熾すという技術がどうやって開発されたのかは知らないが、祈願すれば望める効果を再現するのに一時間以上格闘する暇人はあんまりいないと思う。

海の上など火の精霊の加護の薄い場所では大事な技術だというのが。

日常生活で必要になることは大体可能になったし、小屋を引き払う準備も整った。

すでに荷物も鞆ひとつにまとめてある。

この地でジークを待ち続けることも考えたが、老化の問題があることを聞いた為留まることは出来なかった。

そもそも、記憶が再生されるのかは不明だということで永遠に会えない可能性もある。

会っても、思い出さない可能性もあるのだろうか。

それでも可能性が零でないだけマシというものだろう。

あとは最後の別れを済ませよう。

未練などないといえはないのだが……。

可能であるなら、これまでのお礼をしたいと思うのは普通のことだろう。

多分二度と戻らない町。

嫌なこともあったが、それでも優しくなったときもあったし、彼らが優しくしようとしていてくれたことも解っている。

レイラにも幸せになって欲しい。
育ててくれた孤児院とその出資者にも感謝している。

望む。

彼らの幸せを。

幸福を。希望を。

形にならない望みは大気に溶け。

ゆつくりと恵みをもたらすだろう。

例年より少しだけ豊作になるように。

例年より流行病が軽くすむように。

すべてが叶って。

人ではなくなつたことを再確認する。

それに少しだけ胸が痛んだけれど。

引き留める人も物も何もない私には問題にはならなかった。

本当は、それらを持っていて人として幸せになることをジークは望んでいたのかもしれない。

けれど結局私の手には何もなかった。

あとは目の前の鞆を掴んで、この町から出よう。

遠く遠く。誰も知らない見知らぬ町へ行こう。

たった一人、私の手を掴んでくれる人を探しに。

そう思つても動けない私を、背後から抱きしめる腕があった。

「泣きたいときは泣けよ」

ジークとは、違う体温のない身体。

私も温度を亡くしているのだろうか。

「悲しいことなんて、何もありません」

だから、床に落ちる雫は幻。

何も失ってないし、悲しむようなことは何もないのである。

何もなかった私に幸せになる希望が与えられた。

それは、喜ぶべきことで。

悲しむことなんて何もないのである。

どんなに言い聞かせても。

雫はこぼれ落ち続ける。

だんだんと回された腕に温度がないことさえ悲しくなってきた。気が付かなくなりました。

なんでジークじゃないのって当たり前のことが悲しくて仕方ないとか、レオンにも失礼だと思う。

落ち着くまで泣かせてくれたレオンには感謝しつつ。

精霊の記憶を消す方法がないか、ずいぶん長い間悩んだのは秘密です。

忘れてください……。

第十五話（後書き）

レイラさんには特に念入りに祝福をかけています。

第十六話

手の中には数種類の薬草がある。

今回はこれ売って滞在費にしようと思っていたのに。

希少なものだから十分だろうと思って他に売れるものを用意しなかったのが悪かったのか。

まさか、知られてないとは思わなかった。

効能を説明しても信じてもらえず、売れずじまいだ。

即効性があるものではないうえに需要がないのだ、仕方がない。

仕方がないが、路銀の残りを考えるとため息しか出ない。

とりあえず旅費として用意するのは今度からは貴石か半貴石を中心にした方がいいのかも知れない。

装飾品にしてしまえば目立たないだろう。

それにしてもこの町の人は親切なのか暇なのか好奇心が強いのか。入れ替わり立ち替わり話しかけてくるのでちょっと困る。

広場のベンチに暗雲を背負って座ってるのは迷惑だろうが放って置いてほしい。

遊びに行こうとか食事をごちそうするとか、少し心惹かれる誘いもあるのだが見知らぬ人にそこまでして貰う謂われもない。

何となく怖い感じのする男性が多いので人買いかもしれないと疑ってしまうし。

旅に出てから知ったのだが、旅人には皆さん親切にしてくれるらしい。

買い物も結構値引きして貰えるし、安くてサービスのいい宿などを紹介してくれる。

レオンが側にいるときはそうでもないが、女一人だと心配になるのだろうか。

過剰な親切は申し訳なさが先に立つので丁寧にお断りしているが、笑顔で接してくれる人が多いのは嬉しいものだ。

レオンと旅に出て数年があっという間に過ぎた。

ジークはまだ見つからない。

私は実体化している方が楽なのでほとんどいつも実体化しているが、精霊のように力だけの存在となることも出来るようになった。

生粋の精霊ではないせいか、瞳の色は青いままなので人に紛れるのにも支障はない。

まあ、レオンのように前髪を長くして目を隠せば色は解らないのだろうか。

見た目が悪いのは否定出来ないし。

いまもそうやって買い物に行ってしまったが、早く戻ってこないだろうか。

路銀が工面出来なかった以上このまま留まるのは難しい。

売れそうなものを用意して再訪するしかないだろう。

未練がましく薬草を眺めたあと、やっぱり惜しいのでそっと荷物の中にしまい込む。

次の町で売れるといいな。

しっかり乾燥させてあるので当分は持つだろうし。

命に関わるものだけに、必要としている人に届けたいしね。

それからレオンを待つこと30分。

私の前に立ってるのは見知らぬ誰か。

なぜか現在求婚されています。

運命だとか、理想の相手だとか。

いろいろ勘違いして自分の世界を作り上げてるような人が花束を差し出している風景というのはなかなか見られないものだと思う。

名前も知らないのに求婚できる根性と、衆人環視の中という勇氣は賞賛に値するかも知れない。

それとも大道芸の一種なのだろうか。

周囲の人もかなり呆れている。思い込みの激しい人らしい。

一目惚れから即求婚という流れがこれで5回目という解説をしてる、ふくよかなおばさまに感謝しよう。

いくら断っても全く聞く耳を持たないのも思い込みの激しさ故だろうか。

一瞬ジークなのだろうかと思って悩んだのが悪かったのか。

……ジークとの契約もかなり唐突で強引だったのでちよつとした既視感がね？

すぐに違つたと解つたけど、ジークにばれるとあの笑つてない笑顔が再登場しそうなので絶対ばれないようにしなきゃ。

この町はブラックリストに入れておこう……。今後50年は自主的立ち入り禁止区域だ。

でも今の問題は私に捧げる愛の詩とやらを語ってる人からどうやって逃げばいいのか。

聞かされてる私の方が羞恥で消えてしまいたいのにな、この人はなんで平気なんだろう。

これが男女の差なんだろうか。違つて欲しい。

周りの人の視線が生暖かくて辛い。可哀想な子を見るような目で私まで見ないでください。

もう、このまま実体化やめて消えていいかな？

どんな騒ぎになってもこの視線に晒されるよりはきつとマシだと思えてきた。

あと1分でもあれば実行に移したのだが、その前に。

後ろから回された腕に抱え上げられていた。子供を持ち上げるように。

成長期がいまだにやってこないのを思い出して悲しくなるのでやめてください。

私の成長期はちょっと遠くで迷子になってるようです、早く来て欲しい。

「なに？ え、つと、誰？ 何事ーってレオン？」

びっくりしてわたわたしてる私となぜか腰を抜かしたように座り込んで後ろにじたばたと逃げようとしてる男性。

周囲で見てた人はなぜか顔色も悪くだんだん遠巻きになっていつてる。

蜘蛛の子を散らすように逃げる人がいないのがちょっと不思議になるような光景です。

あれだろうか、視線を逸らすと襲われそうで思い切った移動が出来ないとか？

「人のものに、何ちよつかいだしてんの？」

私はレオンのものになった覚えはない。でもここで言う勇氣はない。怖いから。

……前にも同じようなことを思ったような気がする。

この寒さというか生存本能が全力でがんばって働いてる感覚にも覚えがあるし。

後ろを見て確認する。レオンであってジークではない。ないが……どうしてだろう。

姿形は全く違うのに、ジークのような気がしてならない。

自分の悩みに没頭してる間に名も知らない求婚者は消えていた。

何があったのかは知りたくない。

残されてたアンモニア臭とか、髪の毛とかのことも忘れたい。

怪我はないらしいけど若い身空で永久脱毛されてしまったのは私のせいじゃないはず。

………止めなくてごめんなさい。

あとで脱毛は直せないと思うけど永久の文字だけは消えるようにがんばります、止められなければ。

第十六話（後書き）

成長期と巡り会う前に人間をやめます。

第十七話

町の広場でさらし者になる趣味はなかったので森の中まで移動し、レオンと向き合う。

彼は力一杯視線を逸らしているが、それが逆に怪しいのは自覚してないのだろうか。

姿はどう見てもジークではない。間色の髪と双眸。ジークは金色だった。

顔立ちも、背の高さも違う。違うが……。

さっきの台詞や行動はどう考えてもジークだった。

でもそれでも同じ存在だとは思えない。

さすがに外見だけ違うくらいならすぐに気付いたはずだし。

違うのに、さきほどだけあまりに似ていた。

「もしかして、兄弟とかですか？」

精霊にも兄弟なんて存在するのだろうか。でも兄弟なら友人などとは言わずそう名乗ればいいだけか。

そもそも兄弟でも瞬間的にあれほど似てると怖いか。でも似てる存在というところくらいしか思いつかなかった。

「違う。……俺がジークだとは思わないのか？」

「さすがに違うことくらいは解ります。そんなことも解らない程度の感情なら、さっさと忘れて別の人を見つけます」

間髪入れずに言い返す。さすがに別人だということすら解らないと思われるのは嫌だ。

思いつきり睨んでみたが効果は微妙っぽい。

下から睨んでも子供に威嚇されてる程度にしか思いませぬよね。

宙に浮いてでも上から睨むべきでした。

威圧には失敗したが、それでも渋々話してくれたところによると、以前、レオンはジークの記憶が再生されるかは解らないといったが。

それもそのはず、ジークの記憶の一部はレオンが持っているという。ジークが最期に伝言を託したときに巻き込まれたのかも知れないし、偶然か事故なのかも不明だ。

あるいはジーク自身が私を見つけやすいようにある程度の目印として記憶を託した可能性もあるという。さらに別の可能性もあるらしいが。

とりあえず、その記憶に引きずられての行動だったらしい。

……そうなるとジークの記憶に人格を侵食されているような気がする。

内心びくびくしていると、私の頭を軽く撫でて笑ってくれた。

「ちょっと混乱しただけだ、自分を見失ったりはしない」

その仕草も笑い方もレオンらしいもので、ジークの面影はなかったので多分安心してもいいのだろう。

落ち着いたところで、別の町へ向かって移動を開始する。

森を通ることになったのでさっきの反省を生かして琥珀をいくつか貰っていくことにする。

石ではないけど、そこはこだわるところじゃないだろうし。

貰った琥珀があまりに綺麗だったのでひとつは手元に残すことにした。

人の手に渡って加工されてしまうより、このままの方が絶対に素敵だと思ったから。

そのうち、森に返そうと思う。

そうやって森を往復したりしているうちにやっと思い出した。
永久脱毛の方、ごめんなさい。

‘永久’の解除忘れてました。

今更ですが、解くべきでしょうね。急いで行ってきます。

第十七話（後書き）

短い…。

第十八話

旅に出てから十数年が過ぎ。

私はやっと、ジークを見つけていた。

道ですれ違っただけで解ったので安心したが、問題は人間の、子供だったことだろう。

まさか人間になっっているとは思わなかった。

年齢は初めてであったときの私と同じくらいだろうか。

すでに背は追い越されているのがちよつと悔しい。

もちろん以前のジークほどではないのだが。

横と一緒に歩く男女は、両親だろう。

家族に恵まれたようで、安心する。

着ている服も上質とは言えないがそれなりの仕立てで、何より清潔だった。

呆然と見つめる私に一瞬だけ怪訝そうな視線を向け、彼は去っていった。

怪しい女だと思われた可能性が高い。

実体化していたのが徒になった。

このまま追いかけたら一層不審者に見えそうなので追いかけていたい気持ちを抑え込む。

いろいろと考えないといけないこともあるから、勢いに任せて話しかけられない状態になったのはいいことだったと思おう。

長年切望してきた再会が限りなく微妙なものになってしまったのは

気のせいだと思いたい。
通りすがりの女のことなど忘れてください。切実に。
せめて不審者としてではなく普通に挨拶したいので。

レオンと合流して宿を取る。

毎回毎回恋人同士と誤解されるが慣れてきたのでその辺はスルー出来る。二部屋とるのはもつたないから仕方ない。

今回の宿は当たりだったようできちんと清掃された室内に安心する。ひどいところになると壁がカビだらけだったりするんだよね。

小さな花瓶に花まで生けてあるあたり、値段の割にサービスが行き届いている。

レオンが買ってきた寄せ木細工を弄りながら、これからのことを考える。

記憶の方はレオンがジークと会えば戻せるらしい。

だが、人間として生きている彼は何もかも忘れてこのまま生きていく方が幸せなのではないだろうか。

いつそ過去のことはないもいわないまま、私が精霊として契約を結んでしまえば彼は彼の望む人生を生きられるかも知れない。

問題は私の目が青い為に精霊に見えないことか。

……どうしようもない問題のような気がする。

いつそ、姿を消したまま見守り続けるべきだろうか。

だけど、彼が可愛いお嫁さんを貰って幸せになるのを見続けるというのは辛すぎる。

彼と契約しても、いつか人間となった彼とは別れることになるのを考えるならば。

結婚して生まれるであろう、彼の子孫を未来永劫見守るといっものは

魅力的だが……。

嫉妬で天変地異の一つや二つは起こしそうな気がする。

見守ってて災害を起こすようではむしろ疫病神になってしまう。

どうしよう……。

レオンは好きにすればいいといって傍観を決め込んでしまった。

せめて年長者として助言くらいはお願いしたかったのだけど。

とりあえず、彼の今の生活を見てから考えよう。

結論を先送りにしただけのような気はするが、気にしない。

もし未来設計がすでに決まっているのならそれを叶えてあげたいし。

そうして、彼の家を何とか探し出してこっそり邪魔すると。

なぜか、荷造り完了していました。

家出でしょうか。

家族仲は良さそうに見えたのに。

他のご家族は普通の様子なので、夜逃げって可能性はないようだ。

意外な展開にこれは家出中は困らないように守るべきかと決意を固める。

何が不満なのかは解らないが、置き手紙を書いているところからして働きに出るとかそう言う話でもなさそうだし。

そもそも働きにでるにしては年齢が若すぎるけど。

一目見ただけでジークだと確信したが、緑の髪にも青い瞳にも以前の面影など一つもないので不思議になる。

ついついじっくり見てしまう。

あ、なんだかストーカーのようです。姿を消して観察……。怪しい人に見えない。

しかも私と彼の現在の見た目の年齢差は、私が少年好きな変態のようです。

嫌なことに気付いてしまいました。

これは、自宅にいるときには近寄らず、外にいるときなどの危険がありそうな時だけ見守るべきかも。

プライバシーを侵害しては嫌われるのが確定しそうだ。

「ルシエーラ、いる？」

「え、はい？」

いきなり名前を呼ばれて返事をする。

呼んだのは、ジークだ。いや他に誰もいないので彼以外が呼ぶはずはないのだが。

私の名前を、呼ぶ。

その割になぜか疑問詞が付いてたりするが、当てずっぽうで名前を呼べるはずもない。

記憶があるのだろうか。

ああ、でも。

呼んでもらえた。

忘れられてはいなかった。

それが、嬉しい。

忘れられていてもかまわないと思ってた。

もう一度、会えるという奇跡に比べれば、記憶なんてなくていいと彼がいてくれるならそれでいい。

それでも、こうして呼ばれて。

私は以前の彼に会いたかったのだと、解ってしまった。

姿なんてどうでもいい。種族も、かまわない。

ただ、私との思い出を持っていてくれれば。
他に好きな人がいてもかまわない。
過去の思い出のページとしてでも覚えておいて欲しかった。

まるで見知らぬ存在のように。
他人として扱われるのは、怖かったのだ。

実体化し、彼の名を呼ぶ。
ずっとずっと呼びたかった名前を。
やっと、声が届く。
抱きしめる、腕のぬくもり。
求めていた、笑顔。

やっと戻ってきた、私の大切な人。

彼の気持ちも変わってないようで、安堵する。
私と一緒にいるために家出の準備をしていたらしい。
道ですれ違ったときにすべて思い出し、きっと私が来ると思って支度してたらしい。
見知らぬ人間に見覚えがあったので悩んだよ、と笑われた。
見かけは私よりずっと幼くなったのにすでに態度が以前と同じだ。
傍から見ると結構違和感があるだろう。
この状態で家に留まるのは難しいかも知れないが、それでも家出させてしまうのも彼の将来的にどうだろう？
いきなり家出して戻らないとか、今まで育ててくれた人に申し訳ないと思う。
この辺はじっくり話し合うべきだろう。

とりあえず家出はいったんやめて貰う。

こういう無駄な行動力も懐かしくて、困るけれど少し嬉しい！

二人でならどんな未来でも、きっと幸せ。

第十八話（後書き）

「精霊と彼女」これにて終了です。

最後は長くなってしまうましたが、19話は切りが悪いような気がしてまとめてしまいました。

彼と彼女がこれからどう生きていくのかはご想像にお任せします。

一応決まってはいますが、蛇足になりそうなので。

ここまで読んでくださった皆様に深く感謝いたします。

ありがとうございました。

次回は今更マイブームの異世界（最強）物が書きたい……。のっけから妙に重い話になりそうなので悩んでいます。読んでくださる方はいらっしやるでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0849p/>

精霊と彼女

2010年12月7日07時03分発行